光の扉

藤塚　圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光の扉

【Ｎコード】
Ｎ０２９７Ｉ

【作者名】
藤塚　圭

【あらすじ】
天才と呼ばれた兄を殺した相手の手がかりをつかむために８年前まで住んでいた町に戻ってきた弟。青年の瞳に映るのは復讐。だが、学園生活を送るうちに彼は心を揺さぶられていく。

プロローグ

人はなぜあがくのか。無駄な事をするのか。
手に入れる事が出来ないとわかっていても、叶わないことがわかっていても。それが無意味　だとわかっていても。
それには人によって、様々な理由があるだろう。

家族のため。
恋人のため。
友人のため。
自分のため。
ただ、大切な人のために。

けれど、意味がない。無駄だ。出来ない。と、わかりきっているのに何でそんな事をするのだろうか。
俺がそう質問するときっと兄は、
「いてもたってもいられないからだろうね。」
と、優しく微笑みながら言うだろう。
目を閉じると、兄の微笑みが今でも鮮明に浮かび上がってくる。

兄は…とても穏やかで明るく、優しい人だった。
いつもみんなに囲まれ、中心的な存在だった。
兄は俺の、いや、家族の誇りだった。なのに……。

「天才」って言葉は兄にピッタリな言葉だ。
兄がひとたび動き出せば周りを引き込み、狂わせる。存在自体が奇跡のような人だった。

そして、兄がやり始めたことで失敗した事は1回もなかった。

かっこよく、優しく、明るく、みんなから慕われ、何でもできる兄。俺はそんな兄が大好きで、将来は兄のようになりたいといつも思っていた。

プロローグ（後書き）

初めまして。つたない文章力ですがどうぞ読んでやって下さい。
申し訳ありませんがプロローグ続きます。１回で終わらす予定だったのですが…。
これにこりず、次回もよろしくお願いします。

プロローグ（続）

何でもできる兄に俺は不思議と劣等感を抱く事は1度もなかった。
それは、兄が自分と8歳も年が離れていたこともあっただろうが、それ以上に兄は自分とは別の世界の人だという様に感じ、特別な人だと知っていたからかもしれない。

「天才」「神に愛された男」と、よく周りは兄の事を言っていた。
だが、「天才」「神に愛された男」と、そんな風に言われていた兄は死んでしまった。
兄は本当に神に愛された人だったのだろうか…。そんな風に俺は思った。

本当にあっけない最期だった。
兄が死んでいく光景を、その光景を俺はなすすべもなくただ見ていた。
ただ、見ている事しかできなかった。
力なく倒れていく兄を、赤く自分の血で染まってしまった兄を。

自分はなんて無力なのだろう。

その事を思い出し俺は拳をにぎった。
強く、強く、強く、血が出てしまうほど。
なにもできなかった俺、弱く、見ている事しかできなかった俺。
何もかもがだめだった俺。
だけど、今は違う。目的を果たすために俺は力を手に入れた。
努力した。血反吐を吐くほど。

ただ、力だけを求めた。
強く、強く、強く、ただただ、強さのために。
力だ。あの時力さえあれば……あんな事には……ならなかった。
自分のせいだ。兄が死んだのは。俺の…。

少年が後悔した日、それは、

それは、兄が17歳高校2年生、少年は9歳小学3年生。
とてもとても蒸し暑い夏の出来事だった。

第1話：誓う青年

…あれから8年。

9歳の小学生だった少年は、あの時死んでしまった兄と同じ年になっていた。

少年は兄の墓碑の前に立っていた。

いや、今現在は少年というより青年いや、美青年と言った方がいいだろう。

透き通る様な白い肌。風になびく漆黒の髪。強い意志の灯った黒い瞳。バランスの取れた顔。

さらに170センチの身長に無駄な肉のついていないスラリとした体に細くきめ細やかな指。

完成された容姿に、学校の制服である紺のブレザーに身を包んだ美青年がそこにはいた。

青年は「沖田仁（おきたじん）」と書かれた墓碑を見つめていた。

「仁兄さん。あれからもう8年たったね。俺、兄さんと同じ年になったよ。」

草花が風にあおられてざわざわと揺れる。

穏やかな風が吹いていた。

脳裏にあの日の光景が浮かび上がる。

1日たりとも忘れた事のない記憶、光景。

せみのうるさい鳴き声、周囲の悲鳴子供の泣き声。

周囲に響くパトカーと救急車のサイレン。

目の前に広がった真っ赤な光景とそこに横たわる兄の姿。

絶対に忘れないと誓ったこの記憶。

父さんや母さんが忘れても、他ならぬ俺が忘れない。忘れてなんてやるものか。

……待っていろ

……人殺し

……仁兄さんのかたき

……お前を殺すために俺はこの街に戻ってきた

絶対に殺してやる。

……仁兄さん。兄さんのかたきは絶対に俺がとるからね。

第1話：誓う青年（後書き）

いやー…。やっぱり、小説を書くのは難しいですね。
これだけなのに疲れました…。
次回からはもう少し話は長くなる予定です。

第2話：転校生

朝から公明学園高校の2年3組はざわざわとおちつきがなかった。
それは、「今日、転校生が来るらしい。」という噂でもちきりだったためだ。
「おい、煉(れん)。情報は確かなんだろうな。この組に転校生が来るって話は。」
煉と呼ばれた生徒は呼ばれた青年に振り向き、
「僕の情報が間違っているとでもいうのかな。」
と、にっこり笑った。
青年は顔を青くしながら、
「いやいや、お前の情報の正確さは知っているけど、この時期に転校生が来るのなんて珍しいしな。」
と、焦ったように言った。
煉は2センチもあろうか分厚い手帳を取り出し、ページをぱらぱらめくってゆく。そして、ページをめくる手が止まった。
「間違いないよ。性別は男。名前は沖田咲月(おきたさつき)。編入試験では満点を出したらしいよ。」
といった。
「え～。マジかよ男か。」
「かっこいいかな。」
「でも、満点ってすごくねえ。」
「いやいや、眼鏡のめちゃガリ勉君なんじゃねえの。」
「え～。キモオタ系だったらチョー最悪なんだけど。」
煉によって新しい情報をもたらされた生徒たちはいろいろな憶測を言い合っていたが、「まあ、もうすぐだし来ればわかるだろ。」という結論に落ち着き、みんなどんな奴が来るのか楽しみにしていた。

「え～…転校生を紹介するぞ～。」
咲月は2年3組と書かれたプレートのかかっている教室の黒板の前に立っていた。
黒板には「沖田咲月」と書かれている。さっき咲月自身で書いたものだ。
「沖田咲月です。8年前頃はこっちに住んでいました。どうぞよろしく。」
と、きわめつけは営業スマイル。
すると、女子は「キャー。」と叫び声をあげ、男子も少し見とれた顔をした。

はっきり言って自分は顔がいいらしい。容姿のせいで何度も苦労したが、愛想はほどよく、それに長所の部類に入るし、有効活用しなければならない。

兄を殺した殺したあいつの情報がわずかでも手に入るかもしれないから。
「え～…。沖田の席はあの窓側の一番後ろの席だ。」
担任の平川一（ひらかわはじめ）と言っただろうか、先生がだるそうに言う。

咲月が席に着くと、前の席の男子が振り向いてきた。
「よう、転校生。俺、鳴海浩介（なるみこうすけ）ってんだ。よろしくな。」
と、爽やかに笑った。
スポーツマン系のイケメンって感じだ。制服の上からでも体が締まっているのがよくわかる。
「ああ、こちらこそよろしく。」
咲月も笑顔で応えた。

「おーい、鳴海。転校生に話しかけるのはいいが、それはＨＲが

終わってからにしろ。」
すると、鳴海浩介はぺろりと舌を出し、
「はぁーい、平ちゃん。すいませんでしたぁー。早く仲良くなりたくてぇー。」
と、おどけて返す。
教室に笑い声がひろがった。どうやら、鳴海浩介はこのクラスの中心的な存在のようだ。
「いーじゃん。平ちゃん。みんな早く仲良くなりたいのよ。」
「そーだよ、平ちゃん。けちーぜ。」
「仲良くなりたいって気持ちを踏みにじるの？ひどいぜ平ちゃーん。」
クラスのあっちこっちから声が上がる。
浩介が、ニヤッと笑った。
「わかった。わかった。」
平ちゃんこと、平川先生は両手をあげた。
「よしっ。」
浩介はガッツポーズ。
「ってことで、ＨＲはおわり。みんなあんまり沖田を困らせるなよー。」
と、言い残し平ちゃんは出て行った。
教室の扉が閉まった直後、咲月のもとには大勢のクラスメイトが詰めかけてきた。
「ねえねえ、どこに住んでいるの。」
「何か部活に入るの。」
などなど…。
咲月がどう対応しようかと考えていると、「パン、パン」という音が教室に響いた。

第2話：転校生（後書き）

やっと学校編に入れました。
1日に2話更新は大変です。
学校が休みだからこそ出来ることですね（笑）

第3話：クラスメイト

音が教室に響き、クラス中がそちらに注目した。
それは、さっき咲月に声をかけてきた男子、鳴海浩介だった。
「なんだよ浩介。いきなり拍手なんかしちゃってさ。」
咲月を取り巻いていた男子の1人が言った。
まあまあ。と、鳴海浩介はみんなを制しながら、
「ちょとちょと、みんなひっつきすぎだぜ。咲月も迷惑だろ。」
と言った。

……。はぁ、いきなり咲月と呼び捨てですか。

咲月は何度か転校を繰り返している。海外にも3年程だが行った。なので、咲月は元の頭もいいので、英語、中国語、フランス語、イタリア語、日本語の5カ国の言語を話せる。
と、いうことが言いたかったのではなく、海外ではとにかく日本国内では初対面でいきなり下の名前を呼ばれたのは初めてだった。

咲月は驚いて浩介を見つめた。
「よう、さっきは名前しか言えなかったけどよろしくな。浩介って呼んでくれ。あっ、ちなみに俺、サッカー部に所属してんだ。良かったら見に来てくれ。」
と、スポーツマンらしい爽やかな笑顔で言いつつ、しっかり部活勧誘をしている。

「おい、浩介。なに自分だけ沖田と話しているんだよ。」
「そうよ。抜け駆けするなんてゆるせない。」
「私たちだって友達になりたいのに。」
「君は目立つ。ぜひ、わが演劇部に入らないか。」

最後はなんだかおかしいことが聞こえた気がするが、このクラスは、積極的で仲の良いクラスなのだろう。

完全に熱が入って冷める様子のない口論に咲月はどうしようかと考えていると、咲月の前にすっと手が出された。

咲月が視線を上げると、優しげな風貌をした青年が立っていた。

「僕は、桂木煉(かつらぎれん)て言うんだ。よろしく。」

この騒ぎの中でも、一瞬本や映画の中のお城にいるような錯覚をするほど、優雅がで品性のある動作だった。

「ああ、こちらこそよろし…」

咲月がそう言いながら手を出そうとすると、

「あっ、こらぁ、煉。抜け駆けすんなや。」

こちらに気づいた浩介とほかの生徒が叫んだ。

「君たちが騒ぎばっかり起こして、沖田君が困っていたから僕は声をかけたんだけど……何か僕に文句があるの。」

と、桂木煉はにっこりと上品な笑みでみんなを見渡した。

シーーーーン……。

教室の温度が3度は下がったのではないのだろうか。あれほど騒がしかったクラスメイト全員が黙ってしまった。

咲月は煉の上品な笑みの裏に黒い影を見た気がした。

……こいつ、何者。

第3話：クラスメイト（後書き）

この間、初めて小説の感想をいただきました（＊^＿^＊）
とても感動です！！早速お返事を書かせていただきました！！

お話は少しの間、学校編に入っていきます。
少し、復讐から遠ざかってみました。
飽きずにお付き合いいただければと思います。

第４話：新たな友人

少し話しただけで周りを黙らしてしまった桂木煉はにっこりと笑ってこちらに向き直り、
「みんなからは煉って呼ばれているから、沖田君もそう呼んで。」
と言った。
「わかったよ煉。俺も下の名前で呼んでくれ。」
俺は周りの気まずい雰囲気の中、そう答えた。
「わかった。咲月。これからよろしくね。」
煉はそう言うと、さっさと、自分の席に戻って行った。
……。ってか、誰かこの雰囲気どうにかしてくれ。
先ほどまでの気まずい雰囲気はいまだに残っていた。
煉って本当に何者なんだ……。たった一言でこんな状態に出来るなんて……。いや、考えるのは後だ。とにかく、この雰囲気をどうにかしないと……。
咲月が何かを言おうと口を開きかけたとき、
「はーい。みんな席についてー。授業はじめるわよー。」
これまたいいタイミングで先生が入ってきた。
ナイス先生。

授業に入るとそういえばこの学校の教科書を貰っていないことに気がついた。
しまったな。後で貰いに行かないと。とにかく今は、隣の奴に見せてもらうか。
「ねぇ、悪いんだけどさ教科書まだ貰ってなくてさ、一緒に見させてもらっていいかな。」
隣の席の人は女の子だった。肩までバッサリ切られた髪に、くりくりとした大きな瞳を持った、可愛い感じの女の子だった。

「えっ、…う、うん。いいよ。」
女の子は頬を少し赤らめながら教科書を咲月に見せてくれた。

6限目、今日最後の授業がおわった。
結局、咲月は隣の女の子にずっと教科書を見せてもらっていた。
それも、担任の平川先生こと平ちゃんが、
「おー。悪いね沖田。発注ミスでさぁ、教材が届くの明日なんだわ。」
と、言ったためだ。
そのため、咲月はずーっと隣の子の教科書を見せてもらうはめになったのだ。
「なんかごめんね。今日ずっと教科書を見せてもらちゃって。」
咲月は放課後になると女の子にあやまった。
女の子は、両手を目の前でぶんぶん振って、
「い、いえ。全然いいですよ。先生のミスなんですし。」
と言った。
「そう言ってもらえると助かるよ、えーっと……。」
「あっ、自己紹介してませんでしたね。私、鳥井(とりい)すずめといいます。えっと、あ、あの、よろしくお願いします。沖田君。」
しどろもどろ、顔が赤くなりながらも自己紹介をするすずめ。
「ああ、よろしく。沖田咲月です。えっと、下の名前で呼んでいいかな。」
「あっ、は、はい。もちろんです。」
「じゃあ、よろしくね、すずめ。そして、教科書を見せてくれてありがとう。」
「あっ、は、はい。どういたしましてです。」
すずめは赤くなりながらでも、はっきりとしゃべった。
「あっ、じゃ、じゃあ、また明日です。沖田君。」
すずめは鞄をとると、ばたばたと、教室の入り口に向かって走っ

て……こけた。
「大丈夫。すずめ。」
咲月は心配してすずめに駆け寄ったが、本人はぶつけた赤い鼻をさすりながら、
「えへへ、大丈夫です。」
と、にこにこしながら言った。見た目の割にはがんじょうなようだ。

「じゃあ気をつけて。」
「はい。さようならです。」
咲月はすずめと教室で別れ、少したった後自分も帰りの帰路にたった。

「ただいまー。」
咲月はそう言って玄関のドアを開けるが、それに応える返事はない。
それも当然そのはずだ。咲月は今両親は海外で、二人から離れ、一人でこの街に戻ってきたのだから。兄の手掛かりをつかむために。
初めは、咲月の一人暮らしに反対だった両親だが、
「日本の大学に進みたいんだ。」
といったら、あっさり折れてくれた。
なので、咲月は今このマンションの一室で一人、両親の仕事の都合で大量のお金が送られてくるので優雅な暮らしをしている。
ブブブブブ
すると、咲月が家に帰ったのを見計らったように咲月の携帯が鳴った。咲月は携帯の画面に書いてある名前を見、表情を一転させ、そこには、学校に居た時の交友的な表情はどこにいったのか、咲月の顔に浮かぶ表情は驚くほどに無表情。何の感情も浮かべていなかった。
「はい。咲月だ。……ああ、わかった。場所は。……了解。

今から向かう。」
ブツッ
咲月は携帯を切った。そして、獰猛な笑みを浮かべ、部屋にたてかけてあった愛刀を手に取った。
「さあ、仕事だ。桜花(おうか)。」
と、愛刀に話しかける。
咲月は愛刀を手に、家を出て行った。

第４話：新たな友人（後書き）

しまったあーーーー！！
という心境の作者でございます。
じつは、作って溜めていた原稿がなくなってしまいました……。
なので今、必死に探し中です。

さてさて、学校が終わり家から帰ってきた咲月。電話の相手は誰だったのでしょうか？？
次話、多分判明します。

こんな作者ですが、どうぞ最後までお付き合いください。

第5話：彼女のために

ぴちゃん、ぴちゃん。

つややかな刀身は赤い液体で濡れていてもなお、光を失わず怪しげな光に包まれていた。

「任務、完了……。」

咲月は抑制の無い声で目の前に横たわるさっきまで人であったものを見つめながら言った。

パチパチパチ。

咲月の後ろから拍手が聞こえた。

「美衣(みい)か。」

「あったりー。さすがだね。」

咲月に話しかけられ後ろに現れたのは、年は25歳程度だろうか、165センチ程の身長とショートカットに、7月なのに短パンにブーツという出で立ちの女性だった。

「わざわざ見に来なくても、任務はするし報告もするから来なくてもいいと何度も言っているだろう美衣。」

「あらぁ、咲月は私に会いたくないの。私はさっきの電話だけじゃ物足りなくて、恋しくて恋しくて咲月に会いにきてるのにぃ～。」と言いつつ、美衣は咲月の腕に自分の腕をからめてきた。

「はぁ……。」

咲月は美衣から腕を器用に離し、自分の愛刀である桜花についている血を拭いた。

「美衣。任務完了だ。後始末はいつも通り頼む。」

「はい、はーい。」

と、美衣は携帯電話を取り出しどこかにかけはじめた。

「こちらの任務は完了したわ。後始末はいつもの手順でお願いね。」

と、美衣が言い終わると同時に2人の周りに黒い影が何体も出没し

た。

彼らは咲月が所属している組織の後始末の部隊だ。咲月は数年前、兄の手掛かりを少しでも得るためにこの、「紅の薔薇（ディープレッド・ローズ）」に入った。

この組織は、殺人から荷物、情報まで幅広く取り扱う、いわゆる何でも屋だ。だが、表の世の様な何でも屋ではなく、裏の世を縄張りに事業を展開しており、多くの政治家や警察のお偉い方などの秘密を取り扱いをし、お偉い方の御用達の組織なのだ。なので、表では分らないような情報などが、ここでは普通に飛び交っており、組織が多少の事をしても上層部のお偉いさん方は目をつぶってくれるってわけだ。一番多い依頼がヤバ気な荷物の配達とその警護。次に多いのが殺人の依頼だ。殺人の依頼と言っても、何人も殺しているヤバ気な殺人犯が、こちらの手には負えないからこの組織に被害が広がる前に依頼してくるというわけだ。なので、今回始末したのもそのヤバ気な殺人犯というわけだ。今回は、まるっきり手ごたえがなくて少々気が抜けたが……。

咲月今は剣の腕を買われ、主に殺人の依頼をこなしている。この女性、坂木（さかき）美衣は咲月のサポート役である。咲月は組織に従順に働く代わりに、兄の手掛かりが入ったらよこし、その男を殺す役割を受け持つことを条件として組織に存在している。まぁ、いまだに有力な情報は上がってきていないのだが……。まあそれも時間の問題だろう。この組織の情報網からはなかなか逃れることはできないのだから……。

咲月が兄の復讐を誓ったのが8年前。

咲月が組織に入ったのが、兄を殺されて1年後のわずか１０歳のとき。

それから咲月はただただ、力を求めた。

少年を組織に入る事を許可した首領も少年の力自らが剣の師とな

り、見守ってきた。
なぜ、首領がわずか１０歳の少年だった咲月を組織にいれたのか。
なぜ、自らが少年であった咲月の剣の師となったのか。
それは首領の胸中だけが知っており、咲月も聞いた事がない。
だが、必要になれば首領は語るだろう。彼は、いや彼女はそういう女性なのだから。
それまでは聞く必要のないことだ。彼女は自分の望む、力を与えてくれたのだから。
兄の手掛かりを掴むまでは、この組織のため、いや、彼女のために働こう。彼女のおかげで今の自分はあるのだから。こわれずに。
俺は、あのままだったら壊れていただろう。彼女に会わなければ……。
彼女には感謝しても、感謝しても足りないくらい、俺は首領である彼女に感謝している。

……そう、首領である彼女に会ったのは、それはひどい雨の日だった。

第5話：彼女のために（後書き）

前回のあとがきに書いた原稿のことですが、……全然見つかりません（泣）
なので、これからは原稿なしでコツコツ頑張ろうと思います！！

さて、話ですが、咲月の過去に少しふれたいと思います。咲月は一体どんな少年時代を過ごしていたのでしょうか??

こんな作者ですが、どうぞお付き合いお願いします！
みなさんが少しでも楽しめればと思います。

第6話：いつもと違う日常

首領である彼女に会ったのは、それはひどい雨の中だった。

俺は仁兄さんが死んでしまってから1年程が経ち、１０歳になっていた。

だが、俺の胸中はずっと雨が降り、続け晴れる事はなかった。

しかし、ずっと兄さんの事を引きずって暗い顔をしているわけにはいかない。なので俺は演じた。目の前で死んでしまってショックを受けていていてもなお、懸命に立ち直ろうとする少年を。不幸がおきても一生懸命立ち直ろうとする少年を演じた。実際は、傷は癒えておらず、しかも兄を殺したヤツに対する復讐心でいっぱいだった。そんな時だった。彼女、「紅の薔薇」の首領である彼女に会ったのは。

俺はその日、小学校から帰る途中だった。

「じゃあね、咲月。」

「また明日な沖田。」

「うん。また明日ね。」

俺はいつも通り帰る途中で友達と別れた。兄さんが死んでから家族は引っ越しをした。兄さんのいない家に居ることがつらいということもあっただろうが、親父の転勤がちょうど重なったという事もある。

学校は転校してしまったが、咲月の人柄もありすぐに友人はできた。

いつもと変わらない学校。いつもと変わらない生活。いつもと変わらない日常。

今日もいつもと変わらず学校に行って、そのまま家に帰るはずだ

った。
いつものように家へ向かって歩いていると、ふと刺すような頭痛に襲われた。
「痛っっ。」
だが、それは一瞬で収まりその後は何もないようだった。
「一体何なんだったんだ。」
俺はさっきの事は忘れて再び家への帰路につこうとしたとき、ふと、いつもは気にならない路地が気になった。なぜか。そう聞かれるとどう答えていいのか分らないが、なぜかいつもは素通りして気にも留めない細い路地が気になり、行かなくてはならない気がした。
「一体今日は何なんだよ。」
俺はぶつくさ言いながら吸い込まれるようにその路地に足を踏み入れた。そのとたん何とも言えないプレッシャーが俺を襲った。
「なにっ。なんだこれ。」
だが、プレッシャーといっても立てなくなるようなことはなかったので、俺はそのまま路地を進んだ。進むたびにプレッシャーは強くなっていきこのまま引き返したいという気持ちが生まれたが、それ以上に進まなければならない。という気持ちが勝り、俺は歩みを止めずに進んだ。そして俺は歩みを進めるたびにあの日の…兄さんが死んでしまった日の事をなぜか思い出していた。

ミーン、ミーン。
セミの声がうるさい日だった。
その日、咲月は兄の仁と一緒に新しく発売されたゲームソフトを買いに町へ出ていた。咲月と仁は8歳も年が離れているせいか割と仲が良く、ケンカもしたことがなかった。それに兄である仁は面倒見も良く、周りがうらやましがるほど仲の良い兄弟だった。
「兄さん。あのゲーム売り切れてないかな。」

「大丈夫だろ。それに、売り切れていても、ほかの店に行けばいいだろう。」
俺が仁兄さんに話しかけると兄さんは微笑んで僕の頭をぐしゃりとなでた。俺は嬉しくて兄さんに笑いかけると、兄さんも笑い返してくれた。

「楽しみだなー。」
ゲーム屋からでた僕の手には先ほど買ったゲームが握られていた。
「よかったな咲月。やるの楽しみだな。」
「うん。」
俺はこの後、普通に家に帰ってこの買ったゲームを兄さんとやるのを楽しみにしていた。

だが、そんなささやかな日常は次の瞬間あっという間に崩れ去っていった。

「キャーーー。」
日常はこの叫びをきっかけに幕を閉じた。
「何だ。」
仁は訝しげに眉をひそめる。次の瞬間ハッとした顔になった。
「逃げるぞ。咲月。」
「えっ、どうしたの。兄さん。」
「いいから早く。」
俺は兄さんに引きずられるように走り出したが、途中でこけてしまった。
「咲月。大丈夫か。」
「うん」
その時、兄さんの後ろに黒い影が立っていた。後ろに立っていた人物は黒いヘルメットをかぶり黒いジャケットをはおり、全身黒ずくめで顔がみえず、手にはキラキラと光る包丁をもっていた。

その人物はこう言った。
「おい、そこにいるガキを渡せ。」
と。そこにいるガキとは間違いなく咲月の事をさしていた。

第6話：いつもと違う日常（後書き）

こんにちは。
咲月の過去編はもう少し続きます。というか、やっとまともに咲月のお兄さんが登場しました。次回は仁兄さんの活躍と悲劇にご期待下さい。
……悲劇に期待なんて出来ないかもしれませんが……。

第7話：絶望

「断る。」
仁兄さんは俺の前に立ちふさがりきっぱりと言った。
「おい、この手に持っているものが何なのか分んないわけじゃないよな。」
男は怒りをにじませた声でそう言った。手に持っている包丁が太陽の光に照らされキラリと光る。
仁はその包丁に一瞬もひるまず、男を睨みつける。
「弟に手出しはさせない。」
仁の瞳が強い意志を持ち、きらめく。
「はっ、いいお兄さんですねー。だが、兄ちゃん。そんなふうだと長生きできねぇぜ。」
男は馬鹿にして笑う。
「弟を守るのは兄として当たり前のことだ。」
兄さんかっこいい……。緊迫した空気の中その中心にいるにもかかわらず咲月はそんな事を思っていた。

その時、
ファン、ファン、ファン。
警察が到着した。
「やばい、さっさと逃げねえと……。おい、弟思いの言い兄ちゃんよ、命が惜しかったらさっさと弟を渡してもらおうか。」
「弟を人質に逃げるのか。」
「そうだよ。頭のいい兄さんだな。」
男はせせら笑う。が、急に咲月に向かって手を伸ばしてきた。
「咲月っっ。」
仁は急いで男の手を振り払い咲月を突き飛ばした。
「てめぇ、邪魔すんなや。」

男は激怒し、手に持っていた包丁がきらめき仁に襲いかかる
「兄さんっっ。」
「くっっ。」
仁は身をひねって男の攻撃をかわした。
咲月がホッとしていると、男はそのまま咲月に向かって突撃してきた。
「しまった。」
仁が叫ぶ。
次の瞬間、咲月は首筋に包丁をあてられ男の手中にあった。
「兄さんっ。」
「咲月っ」
「動くな。動くとどうなるか分かっているよな。」
そう言われると、仁はもちろんのこと警察も動けず手出しができなくなってしまった。
俺のせいだ……。
咲月はそう思い拳を強く握り締めた。

「君はすでに囲まれている。おとなしく少年をはなし、投降するんだ。」
警察の説得もむなしく、男の心を動かすことはなかった。

どうにかしなきゃ、俺が捕まったせいでこうなったんだ。どうにか……。
咲月は決心すると、男の腕にパクリとかぶりついた。
「痛っっ。」
男の束縛から解放された咲月は仁に向かって走り出した。
「兄さん。」
「咲月。大丈夫か。怪我ないか。」
走ってきた咲月をしっかりと抱きしめ仁は愛おしい弟に聞く。
「うん。だいじょうぶだよ。」

「そうか。」
そう仁が安心したとき、
「このガキィィィィィィィィ。」
絶叫が聞こえた。仁が顔をあげると男が包丁をふりかざし、いつのまにか目の前にいた。
「咲月っっ。」
仁は咲月をかばうために咲月を抱え込む。
「ぐっ。」
「兄さん。」
顔をあげるとすぐそばに兄さんの顔があった。だが、その顔にいつもの穏やかな微笑みはなく、そこにあるのは苦痛に耐える必死な兄の顔だった。
「ははは。」
咲月が顔をあげると黒い男が笑っていた。
「お前のせいでお前の兄さんはこうなったんだぜ。」
その言葉がグサリと咲月の胸に刺さる。その時、咲月を抱えていた腕の力が抜け仁はふらぁと倒れてしまった。
「ちっ、こんな話している暇じゃなかったな。さっさと逃げねえと。警察の野郎共を蹴散らすか。」
男はそう言うと、警備が一番手薄な場所に向かって走り出していった。
一方咲月は呆気にとられていた。自分の前で兄が倒れているのだ。
「兄さん。兄さん。目を開けてよ兄さん。兄さん。にいさぁぁぁぁぁぁん。」
咲月は叫んだ。その言葉にびっくりして赤ん坊が泣く。だがそんな事には構っていられない。兄さんが倒れたのだ。兄の周りに赤い液体が広がっていく。
ピーポー、ピーポー、ピーポー。
救急車のサイレンが聞こえる。せみは一層うるさく鳴く。
「いやだ、兄さん。」

咲月は兄を揺さぶるが反応が返ってこない。いつもなら、「どうした。」と返してくれるのに。

「兄さん。いやだよ兄さん。」

ふと、あの黒い男の言葉がよみがえった。

「お前のせいでお前の兄さんはこうなったんだぜ。」

「俺の、俺のせいなのか。俺の……。あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー。」

俺の意識はそこでブラックアウトした。

第7話：絶望（後書き）

お兄さんやられましたねー…。
見せ場なしです。まあ、見せ場を作ろうだなんてこれっぽっちも思っていませんでしたが。

頑張って次回も更新するので、よろしくお願いします。

第8話：後悔

次に咲月が目を開けた時に見た光景は真っ白なてんじょうだった。
「咲月。目が覚めたのね。」
首を動かすと、父さんと母さんが視界に入ってきた。
「父さん、母さん。」
「あぁ、よかった。目が覚めて…。」
そこで母さんは泣き崩れた。
俺が訳も分からずに泣いている母さんを見ていると、父さんが咲月に近づいてきた。
「おまえ、ここがどこか分るか。」
俺は周囲を見渡した。真っ白な部屋だった。窓際には花の生けられた花瓶が飾られている。
「どこって、病院だろ。」
「そうだ。それじゃあ、自分がどの位寝ていたか分るか。」
「どの位って、1日位じゃないの。」
咲月が聞くと、父は首を横に振った。
「6日間おまえは気を失って寝ていたんだ。」
「6日も……。」
そんなに寝ていたのか……。
「お医者様によると、精神的なストレスが原因だろうと言っていた。なにはともあれ、お前の眼が覚めて本当に良かった…。」
俺が父さんを見ると、目にうっすら涙がたまっていた。
俺はそれを見ていないことにして、とにかく聞きたかった事を真っ先に聞いた。
「父さん。」
「何だ。」
「兄さんはどうなったの。」

……病室に静寂が訪れた。

「うううう、ひっく、ひっく。」

母さんが一層激しく泣き始めた。

静寂の理由。

母さんが泣く理由。

それをつなぎ合わせれば、いやでもわかった。

「咲月、仁はな……。」

「いいよ、父さん。わかったから。兄さんは……もういないんだね。」

「……ああ。出血がひどくてな……。だめだった。」

「そうか。」

「それじゃあ、犯人の方はどうなったの。」

「そっちは、警察をうまく切り抜けて逃走中だ。重傷者も結構でている。」

「そうか。」

俺はあの時の事を思い出していた。

セミのうるさい鳴き声。兄さんの必死に耐えている苦悶の表情。真っ赤に染まっていくアスファルトの地面。そして、あの黒い男の言葉。

「お前のせいでお前の兄さんはこうなったんだぜ。」

……俺のせいだ。俺の……。俺があの時余計な事をしなければ…兄さんはあんなことにはならなかった。俺の……。

「咲月。」

俺がハッと気がつくとお父さんとお母さんが心配そうに俺の顔をのぞきこんでいた。

「大丈夫だよ。」
そう言い、俺は無理やり笑顔を作る。うまく笑えていた自信はない。だが、両親があまりにも心配そうだったから……。
「そう。」
母さんは微笑んだ。
「それじゃあ、面会時間がぎりぎりだから、母さんと父さんはもう帰るね。また明日来るから。」
「うん、わかった。おやすみ。」
俺は手を振り、2人を見送った。

バタン

扉が閉まると病室には俺1人になった。
兄さん、ごめん。ごめんね。どんなに後悔してももう遅いけれど、ごめんなさい。俺のせいでこうなったんだよね。
兄さん。兄さんは望まないかも……いいや絶対望まないだろうけど、兄さんのかたきは俺がとるから。絶対に、俺がとるから。
……絶対捕まるなよ、黒服の男。俺が兄さんのかたきをとるまでは。復讐をこの手で果たすまでは。
少年の瞳には、悲しみ、苦しみ、なにより、強い憎悪を灯していた。

咲月は回想から引き戻された。
「はっ。いけねえ、昔の事を思い出していたよ。なんでかな。まあ、昔と言っても1年前なんだけどな。」
少年は路地を進んでいた。進んでいると、廃棄されたさびれた建物が目に入った。咲月は吸い込まれるようにその建物の中に足を踏み入れた。

第8話：後悔（後書き）

長いですね～……。
なかなか首領との出会いまでにたどり着きません…が、次こそは絶対会えるとおもいます。
気を長く、待っていて下さい。

第9話：出会い

足を踏み入れると辺りはうす暗く、咲月が足を進めるたびに埃が舞い、咲月はせきをする。

「なんなんだ、ここ。」

そこは、現在は全く使われていない廃墟だった。

1階は全くと言っていいほど人の気配がなかった。だが、咲月はここのどこかに人がいるような気がしていた。

2階、3階と階段をのぼり、咲月は屋上の扉を開けた。外は雲がかかり今にも雨が降り出しそうな天気だった。

咲月は辺りを見渡すと、ある一点の場所に目がくぎづけになった。それは、人だった。そこには人が1人倒れていた。だが、ただ倒れているわけではなかった。その、倒れている人物を中心に赤黒いものが広がっているのだ。

「…血だ……。」

ぽつりと、咲月はつぶやいた。

ぽつぽつと、雨が降り始める。やがてそれは土砂降りになり、血を洗い流していく。雨の中、咲月は倒れている人物を凝視していた。その倒れている人物と、兄の姿が重なった。

兄さん……。

咲月はやるせない気持ちになったが、それを振り払い、

「死んでいるのか。」

と、答えを求めているわけでもなくそうつぶやいた。そのとき、

「そうだ。その男は死んでいる。そしてお前も…。」

後ろから突然聞こえた声に咲月はすぐにふりかえった。ふりかえった視線の先には女性が刀を振り上げ切りかかってきていた。
「うわぁっっ。」
咲月はとっさに転がり、刀をよけすぐに起き上がる。
「ほう、さっきのをよけるとはな。一般人は普通突然の事に反応できず、そのまま殺されるのにな。なかなかやるな、少年。」
その女性は金髪で輝く髪を1つに結い上げ、その青い瞳をほそめ、心の底から楽しそうに話していた。咲月がその女性をまじまじと見つめると女性はにっこりと笑った。とてもきれいな笑顔だ。他の人がこの笑顔を見たら絶対見ほれるだろう。それほどの美貌を女性は持っていた。だが、咲月はそうはならない。さっき、殺されかけたばっかりなのだ。そうなるほうがどうかしている。
少し切れ長の目を持ち、気の強そうな女性は口を再び開く。
「なあ、少年。悪いが死んでもらうよ。」
にこやかに、さらりと物騒な事を言う女性。
「な、なにを……。」
咲月は突然言われた事にうろたえる。

何を言っているんだこの人は…。

「だ・か・ら、死んでもらうって言ったんだ。この現場を見られて素直に生きて帰すわけにはいかないからな。運が悪かったな、少年。」
咲月の背中にゾクリと悪寒が走った。

辺りは雨の音以外に2人の声しかしなかった。

雨はしだいに強くなり、2人を強く打ちつける。

それが、彼女…。俺と「紅の薔薇」の首領である彼女との初めての出会いと、会話だった。

第9話：出会い（後書き）

少し、更新が遅くなって申し訳ありません。
現在、受験戦争の真っ最中ですが、頑張って更新しますので次回もよろしくお願いします。

第１０話：覚悟

咲月はヤバい。そう感じた。この人は何の躊躇もなく俺を殺すだろう。だが、俺はこんなところで死ぬわけにはいかない…。どうすればいい…。どうすれば…。

「あの人を殺したのはあなたなんですか。」

咲月は女性にそう聞いた。はっきりしている。殺したのはこの女性しかいない。だが、わかっていても咲月が女性に質問をしたのは、はっきり言うと時間稼ぎのためだ。このあいだに何としてでも逃げる経路を探し出さなければならない。

「くっ、くっ、くっ。」

女性は笑った。

「時間稼ぎか、少年。私から逃げられるとでも。無駄なことをする。」

ぎくりと咲月の方がこわばった。ばれている。この女性、かなり頭がきれる。この女性の頭がきれるとなると、自分はここから逃げ出すのは不可能かもしれない。ただでさえ、この人から出されている異様なプレッシャーに気圧されているのに…。

「まぁいい。お望み通り少しお話をしようか、少年。」

「えっ…。」

何を言っているんだこの人は…。わざわざ逃げる方法を考える時間を俺に与えるなんて…。それとも、なにがなんでも俺を殺せるという自信の表れなのか……。なにはともあれ、運がいい。

「少年の言う通りその男を殺したのは私だ。だが、なにも私は私情でその男を殺したわけではないぞ。その男は殺されても仕方がない、どうしようもないヤツだったんだ。」

「えっ、それはどういう…。」

俺は必死に逃げる方法を考えていたのに女性のその言葉に思考を

中止してしまった。そして、女性の言う言葉にどんどん思考が引きずられていく…。
「この男は、殺人犯なんだよ。それも、女性ばかりを狙い１５人も殺した凶悪で最低なヤツだ。」
女性の表情は何も映さず、ただ事実を淡々と言っているように見え、俺は、あぁ、この人の言っている事は事実なんだ。と思った。
「私は国からこの男を殺すように依頼された組織の者だ。」
なにっ、何で国が殺人なんかの依頼をするんだ……。
「殺人を依頼するのは犯人が判っていなかったり、警察の手に負えないものばかりだ。私たちの組織は殺人だけではなく情報も取り扱っているからな。もちろん、表は何の変哲もない会社のふりをしているが、裏では極秘情報や荷物、殺人を請け負っている。だから表では得られない情報を私たちは取り扱い、その情報網で得た情報をもとに殺人の依頼をしたりしている。」
その言葉に俺は思考を巡らせる。その間にも女性の説明は続く。
「私たちは極秘情報を取り扱っているからそれを外に漏らす事はしないし出来ない。些細なことでも大変な事になるからな。そういうわけだから、私たちの任務を目撃してしまったやつには消えてもらうことになっている。組織の力を使えば大抵の事はもみ消す事が出来るが、まぁ、念には念をってやつだな。少年、自分が死ぬ理由はわかったか。運がなかったな。」
女性はそこでしゃべるのをやめると咲月に目を向ける。
咲月はうつむいていた。そして、口を開く。
「なあ。」
「うん、何だ。」
「極秘情報と殺人を請け負っているって言ったよな。」
「言ったがそれがどうした。」
「それは、警察とかでは絶対手に入らないものとかも当然取り扱っているんだよな。」
「そうだが、それを知ってどうする。少年。」

「……。」
「何を考えている。少年。」
「……てくれ。」
「何だ。」
「入れてくれ、俺を。その組織に。」
その言葉とともに咲月は顔をあげる。咲月の顔に表情は無かった。年相応の無邪気な表情や、その他の喜怒哀楽をすべてどこかに置き忘れた表情だった。
女性は驚き、まじまじと咲月を見つめる。そして、咲月の表情、なによりも強い光を灯した瞳に何かを感じたのか沈黙した。

どの位経ったのだろうか、打ちつける雨によって咲月は体温を奪われていく。だが、どれほど雨によって視界が悪くなっても咲月は決して女性から目をはなさなかった。

やがて、女性は口を開いた。
「死ぬ覚悟はあるのか、少年。」

雨によって言葉などかき消されようなほどの声で言ったのにやけにその言葉は咲月の耳に響いた。
咲月の目には迷いなど一切なかった。そして、答えは初めから決まっている。
「当然だ。」

第１０話：覚悟（後書き）

こんにちは。今にも死にそうな藤塚圭です…。
体調を崩していますが、なんとか執筆できました。

咲月の過去編はまだ続きます。長くて申し訳ありません。
早く現代編に戻りたいのですが…。なかなか…。

次回も頑張って更新するので読んでくださったら嬉しいです。

第11話：生と死

覚悟。そんなもの決まっている。俺はあの日、兄さんと一緒に死んだんだ。そして、一度死んだ人間が、なぜ死を恐れる。

「少年。貴様の覚悟、見せてもらおうか。ついてこい。」

女性は扉を開き、屋上から姿を消した。咲月はあわてて女性の後を追う。

女性は机の前にいた。そして、机には2丁の拳銃が置いてあった。

女性は咲月が自分のもとに寄って来たのを見てから口を開いた。

「ここに2丁の拳銃がある。この2丁の拳銃には片方には空砲、もう片方には実弾が入っている。少年、お前はただどちらかの銃を選び自分に向けて撃てばいい。私にその覚悟とやらを見せてくれ。」

咲月は目をつぶる。自分は死など怖くない。だが、自分には生きなければならない理由がある。

咲月は拳銃を選んだ。そして自分のこめかみへ銃口をあてる。

「最後に聞いていいか少年。」

女性が引き金を引こうとしている咲月をひきとめる。

「なぜ、死に急ぐ。」

「……。別に死に急いでいるわけではない。ただ、目的のために命をかけるのはかまわないし、死んだらそれまでのヤツだったってことだ。」

「そうか……。」

「そうだ。そろそろいいか。引き金を引いても。」

「ああ、いいぞ。」

咲月は一瞬もためらわず引き金を引いた。

パンッ。

周囲に沈黙がおちた。

「……生き残ったな。少年。」

「…耳が痛い……。」

「ははははっ。あんだけの事をやったのにのんきだな。」

女性は心の底から楽しそうに笑う。

「で、俺の覚悟は伝わったのか。」

「ああ、あそこまで躊躇いもなく引き金を引けるなんてな。伝わったぞ、少年の覚悟。」

今度は真面目な顔をし、女性は言った。

「だったら……。俺を組織に入れてくれるのだろうな。」

「その事なんだが、理由を聞かせてもらえるだろうか。」

「何で言わないといけないんだ。」

「何の目的でいるかわからないヤツを組織に置いとくわけにはいかないだろう。」

「それもそうだな…。」

咲月は話した。咲月の兄、仁の事を。そして、兄を殺した犯人の事を。そして自分がその犯人を殺したいということを。

「フム…。少年、お前は復讐が目的か。」

「はっきり言えばそういうことになるな。」

「それで少年。お前はその為の力を持っているのか。復讐を成し遂げるだけの力を。」

「それは…。」

咲月は沈黙した。はっきり言って自分は何の力も持っていなっかった。

「それと少年。組織に所属するということは、自分の手を血で染める事になるという事になるだろうという事をわかっているのか。」

「それはかまわない。」
咲月は即答した。
「目的を成し遂げる事が出来るのなら、何を犠牲にしてもかまわない。」
女性は黙っていた。何かを思案しているようだった。そしておもむろに口を開く。
「いいだろう少年。組織への加入を許可しよう。私の名前は、アイリス・ルクセンブルクだ。組織、紅の薔薇の首領をしている。」
咲月は驚いた。目の前の、年は２８位に見える女性が組織というもののトップに立っているという事実に関してだ。そして、何となく納得できた部分もあった。女性のまとう雰囲気には圧倒されるオーラが漂っており、その口から語られる言葉には威厳が感じられたからだ。そして咲月も自己紹介をする。
「沖田咲月。年は１０歳。」
次は女性、アイリスが驚く番だった。
「少年、いや、咲月。お前はまだ１０歳なのか。」
「そうだけど、それがどうかしたか。あっ、どうかしましたか。」
咲月は言葉を言いなおす。目の前の女性が首領だという事を思い出したからだ。
「いや、口調と雰囲気からもっと上かと思っていたからな。気にしないでくれ。」
「わかりました。」
「いきなり、敬語を使わなくてもいいぞ。」
「いえ、そういうわけにはいきません。それに、これは自分のあなたに対する敬意も込められていますから。」
１０歳の少年らしくない雰囲気と口調。一回り以上年が離れている少年にアイリス一瞬気圧された。
ふっ、まさかこの私が少年なんかに気圧されるとはな。まったく、面白い少年だ。
アイリスは口元を歪める。

「それで、咲月。お前の目的を成し遂げるためには力がいる。それはわかるな。」
「はい。」
「私のもとで剣を学んでみないか。」
咲月は驚いた。自分の様な子供にこんな事を言うとは思っていなかったからだ。だがこれは、願ってもいないチャンスだ。あいつを殺してやるための力を得ることができる。
「はい。よろしくお願いします。」
咲月の目に迷いはない。あるのは殺意と決意の光だけだった。

第１１話：生と死（後書き）

こんにちは。
投稿できて、安心している藤塚圭です。
やっと過去編が終わりをみせました。次回は現代編に戻ります。
誤字、脱字などありましたら、ご気軽に言って下さい。
あと、ご感想などをいただけると嬉しいです。小躍りしちゃいます（笑）

第１２話：驚き

「……き。……つき。ねえ、咲月。」
ハッと気がつくと美衣がいぶかしげな表情で俺を見ていた。
「さっきから何度も呼んでるのに、どうしたの。」
俺は苦笑した。どうやら昔の事を思いだしているうちに周りのことが見えなくなっていたらしい。
「いや、悪いな。何でもないよ。」
「ふぅ～ん。」
美衣は疑わしげな表情をしていたが、それ以上突っ込んで聞いてはこなかった。

あれから俺はアイリスを師とし剣術を死にもの狂いで学び、身に付けた。
ただただ、あいつを殺す力を得るために…。血反吐を吐くほど、手にまめができて何度もつぶれて痛い思いをしても俺は剣を振り続けた。そのかいがあって、元々才能があったのか俺はメキメキと実力を伸ばし、組織のなかでもかなりの実力がある。
そういえば、アイリスは見た目は外人なのに刀を主として使った戦いをする。一回なぜかと聞いたら曾祖父が日本人で、有名な剣術の師範だったらしい。組織の後継者問題の事もあり、幼いころから叩き込まれたという。
「当時は修行はとても辛かったが、今は感謝している。私は今この強くなった力のおかげで組織をまとめる事ができているのだからな。」
と、笑って答えていた。
その様子を見て咲月は自分もいつかアイリスのようになりたいと思った。

咲月と美衣は任務を終えて、商店街を一緒に歩いていた。
「というか美衣。いつまでついて来るつもりだ。任務はもう終わって用はないはずだぞ。」
咲月は美衣に聞く。
「えぇ～。いいじゃない、任務以外でも一緒にいたって。」
「いや、何も文句は無いのだが俺はもう家に向かって帰っているんだが…、家までついて来るつもりか。」
「うん。もちろん。」
がっくりとうなだれる咲月。もちろんってなんだ。もちろんって…。俺の家までズカズカと踏み入るつもりかこいつは…。
「咲月の新住居のチェックをしないとね。あと、他の女が寄りついていないか心配だしぃ～。」
と言って腕をからめてくる美衣。
「女なんか作ってないから帰れ。」
と、俺はベリッっと美衣を引き離しながら言う。
「うぅ～。いいじゃない、別に。」
美衣は上目づかいで咲月に文句を言う。
「よくない。普通1人暮らしの男の家に1人で行こうとする女がいるか。彼女でもないのに。って、ここにいたな。普通じゃないやつが……。」
と言い、ため息をつく咲月。
「なによ。普通じゃないって、私が無神経な女みたいに言わなくてもいいじゃない。」
ぷう。と頬をふくらませて文句をいう美衣。
咲月はその美衣のふくらんでいる頬にちょんと人差し指でつついた。
「なによっ。いきなりっっ。」
咲月につつかれた頬を手で押さえて真っ赤になりながら言う美衣。

「いやぁ、怒った顔がかわいいなぁ～。なんて思ったから…ついな。」
からりと笑いながら言う咲月。その言葉にますます真っ赤になる美衣。
いやぁ、おもしろいなぁ～。美衣は結構遊んでいるように見えて結構純情だからからかいがいがあるんだよなぁ～。なんて思っている咲月。一方美衣の方は……、
な、なんなのよっっ。いきなり、か、かわいいなんて…。その顔で笑顔で言われるとてれるじゃないっっ。もう、どうしよう。絶対顔、赤くなってる…。と、とても慌てていた。
「わ、私帰るっっ。」
と言い、美衣はほてった顔を冷ますように両手を頬にあててバタバタと走って行った。
「おー。気をつけて帰れよー。って、聞こえてないかな…。」
咲月は美衣を見送るとさっきまでの表情は消え失せ、考え込む表情になった。
初日は何の情報もなしか。まぁ、８年も前の事件だし仕方がないと言ったらそこまでなんだが……。なにか、わずかでも情報があったら自分でも動く事が出来るんだけどなぁ～……。まぁ、この際贅沢は言っていられないよな。だって、この街に戻ってこれただけでも十分すぎる事なんだから…。
と、考え事をしながら歩いていると、

ドンッ
バサバサー

咲月はちょうど本屋から出てきた人物にぶつかってしまい、なおかつその人物の持っていた本がばらまかれてしまった。
「あっ、すいません。」
と、慌てて謝る咲月。

「い、いいえ。き、気にしないでください。」
ふと、聞き覚えのある声に咲月は顔をあげると、わたわたと本をかき集める少女の姿が目にはいった。
「えっ、す、すずめ。」
「は、はいっ。……えっ…、沖田君。」
突然自分の名前を呼ばれた事に驚き、すずめは顔をあげ、咲月を確認して驚き、すずめは2度のビックリ体験をした。

第１２話：驚き（後書き）

日にちが変わってしまった…。
５日のうちに更新しようと思っていたのに…。

さて、咲月は帰りにばったりすずめと出会いました。
そこで交わされる言葉は何でしょう？

第13話：確信犯

すずめは元々大きな目をさらに大きく見開いて驚いている。何もそこまで驚かなくても…。なんか少し傷つくなぁ～…。とにかく今はやらないといけないことがある。

「あぁ、ごめん。ちょっと考え事していてさ。とにかく、本拾うよ。」

と、咲月はすずめが落とした本を拾い始める。それにしても、十数冊はあるだろう本の数…。一冊の本の表紙を手に取り見てみると「サルでもできる簡単料理レシピ」と書いてあった。

「い、いいですよ。私も不注意だったんですし。」

と、すずめは咲月を止めるが、

「いいよ。こっちも悪かったんだし、2人で集めた方が早いでしょ？」

と、にっこりと笑う。

「はう……。じゃ、じゃあお言葉に甘えて、沖田君はそっちをお願いします。」

すずめは顔を赤くしながら少しうつむいて言った。

「ああ、わかったよ。それとすずめ。」

「はい。何でしょう？」

すずめは本を拾い集めながら、咲月にこたえる。

「沖田君なんて他人行儀な呼び方しないで下の名前で呼んでいいよ。」

バサバサバサ

咲月がそう言ったとたんすずめは集めていた本を再びバサバサと取り落とした。

「……え？い、いえそれは……。」

突然あたふたし始めるすずめ。それをおもしろいなぁ～なんて考えながら見ている咲月。
「何？ダメなの？？」
少し残念そうな表情をして言ってみる。すると、
「そ、そういうわけでは…。」
手をブンブンと振りながらすずめは否定する。
「た、ただ私、お、男の人の事を下の名前で呼んだ事がなくて……。」
顔を真っ赤にしてすずめは言った。
「だったら俺が初めてなんだね。」
「はい？」
「下の名前で呼ばれるの。」
と、咲月は誰が見ても思わずうっとりと見とれるような笑顔をみせる。
「はうあ……。」
みるみるただでさえ真っ赤なすずめの顔は赤くなっていく。
「どうした？すずめ？顔が赤いぞ？」
確信犯である咲月はさらりとそんな事を言っている。そんな咲月が確信犯である事を知るはずもないすずめは、
「い、いえなんでもありません。なんだか暑くて。」
と、精一杯ごまかしていた。
「そう。で、呼んでくれるよね。名前。」
にっこりと咲月は言った。
「でも、沖田君。」
「咲月。」
「えっ？」
「咲月って呼んでよ。」
「さ、咲月君。」
「よくできました。」
と、咲月は微笑みながらすずめの頭をなでる。すずめはまた顔を真

っ赤にしていた。
「よし、じゃあいいかげんに本を集めないとね。」
と、咲月は本を再び拾い集める。
「あ、は、はい。」
と、すずめも本を拾い始めた。
咲月は本を拾いながら表紙のタイトルをみていた。「誰でもできる簡単レシピ」「十分でできる簡単クッキング」など、どれも全部料理の本ばかりだ。
全部料理の本だな…。何か料理でも作るのか…。だけど、この量はありすぎだろ……。
全て拾い集めて咲月はすずめに本を渡そうとしたが、やっぱりやめた。彼女の足取りを見ているとあぶなかっしくて見ていられないのだ。
「さ、咲月君。あの、本は……？」
「一緒に持って行くよ。」
「えっ？」
「あぶなっかしくて見ていられないから一緒に本を運ぶよ。」
「で、でも……。」
「いいから。」
と、そこで咲月は微笑む。
「人の好意は素直に受け取っておくもんだよ。」
「は、はい。……では、よろしくお願いします。」
と、すずめはとびっきりの笑顔をみせる。
「本はすずめの家でいいのかな。」
「はい、そうです。あっ、家はこっちです。」
と、トテトテと歩いていくすずめ。
その横に並んで歩きながら咲月は聞いた。
「この本って全部料理の本だけど、すずめが作るの？」
「あっ、はい。あたし1人暮らしなんで自炊なんです。だけど、洗濯とか他の事はできるのに料理だけはからっきしダメで……。少

しでも勉強しようと思って本を買ったんです。ちょっと買いすぎましたが……。」
と、あははと笑うすずめ。咲月にはその努力しようとしているすずめ姿がとても眩しいくらいに輝いて見えた。
「……。料理、教えようか？」
「はい？」
「だから、料理教えようかって言ったんだけど。」
「……え。…いいんですか？」
「べつに、俺も1人暮らしだから簡単なものなら作れるしいいよ。」
「本当ですか！？嬉しいです！！」
と、とっても嬉しそうに頬を染めるすずめ。
「では、お願いしますね。」
「ああ。」
と、スキップしそうなほどご機嫌なすずめを横に見ながら咲月は考えていた。
何で俺はこんな事を言ったんだ。こんな人に深入りするような事をしようとするなんて……。俺は今まで表面上は人とは仲良くしてきたがいつも一歩線を引いて接してきた。なのに何で……。
咲月は表面上とはうらはらに、動揺に襲われていた。
そして、咲月は思いとはうらはらに、自分がその料理をすずめに教えるのを楽しみにしているのに気づき、それがさらに咲月を動揺をさそった。
「ここが私の住んでいるアパートです。」
すずめの声に咲月は思考を現実に引き戻される。咲月が顔を上げるとそこには割ときれいな白いアパートが建っていた。

第１３話：確信犯（後書き）

こんにちは。ここまで読んでくださってありがとうございます。

次回は、咲月のお料理講座です。のほほ～んとした空気をお楽しみください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0297i/

光の扉

2010年10月15日17時48分発行